

幕末・明治を生きた人々

～書簡とその周辺資料～

2015年5月25日(月)－7月18日(土)

東海大学 湘南校舎 付属図書館展示室(11号館1階)

9時－17時 (土曜日9時－16時 / 日曜閉室)

～ 最近の展示 ～

2010年 6月 ノーベル物理学賞1901-1950
～近代科学に影響を与えた科学書と共に～

11月 豊道春海先生作品展

2011年11月 悠久のナイルと人々～鈴木八司古代エジプトコレクション展

2012年 5月 國文學の傳燈 写す・読む・伝える－桃園文庫の世界－

2013年 6月 語り継がれる書物たち

2014年 7月 科学と技術の古典

11月 書物に棲む動物たち

展示にあたって

今回の展示では、ペリー来航から明治初期の時代に焦点をあて、書簡を中心にお紹介します。

まずは、主な出来事を時系列に並べ、関連した人物（佐久間象山、吉田松陰、高杉晋作、坂本龍馬、西郷隆盛、伊藤博文、木戸孝允など）の書簡類と関連資料を展示しています。さらに明治の文学と文明開化に関する資料として、夏目漱石書簡、東京高輪海岸蒸氣車鐵道走行之全圖などを選定しました。

書簡資料は主に東海大学付属図書館が昭和52（1977）年に購入した「北尾コレクション」から構成されています。これは札幌市在住の北尾義一氏が親子二代にわたって蒐集された、主として近世から近代にかけての武将や僧侶、儒者の書簡類約三百点から成るコレクションです。

歴史に名を残した人々の墨跡を通じて、その人柄や時代を感じていただけたら幸いです。

ペリー来航 (1853~1854)

嘉永6（1853）年、提督マシュー・カルブレイス・ペリー率いるアメリカ合衆国海軍の艦隊が浦賀沖に出現した。老中阿部正弘をはじめとする幕府側は事前にオランダ王室を通してアメリカ艦隊の来航を把握していたものの、積極的な対応策は取っていなかった。久里浜への上陸を許されたペリーは浦賀奉行と会見し、大統領フィルモアの親書などを手渡した。半年後の嘉永7（1854）年に再び浦賀へと来航したペリーは、日米和親条約を締結、更に和親条約の細則を定めた下田条約を締結したのち琉球を経て帰国した。この二度目の来航の際、下田沖に停泊するポーハタン号に長州藩の吉田松陰が密航を企てる事件が起き、松陰に密航を勧めたとされる松代藩の思想家・西洋砲術家の佐久間象山と共に蟄居を命じられている。

1. ***Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by order of the government of the United States***

Washington : A.O.P. Nicholson, 1856

3v ; 30cm

アメリカ政府の委託により、ペリー提督本人の航海日誌、軍事上の通信文、乗組員らの日記をもとに、ペリー監修、フランシス・ホークス編集で刊行したもの。日米和親条約の全文も収録されている。

翻訳書：「日本遠征記」1-4（岩波文庫）岩波書店刊



資料1より

2. 金海奇觀 (キンカイキカン)

大槻磐渓編；岩下哲典監修・解説

東京：雄松堂書店，2014.9 [原装影印版]

2軸；30cm

嘉永7(1854)年、再渡來したペリー艦隊を描いた絵巻の影印本。「金海」とは「金川(=神奈川)の海」の意である。

3. 大槻磐渓書簡：香雪宛 (オオツキ バンケイ ショカン：コウセツ アテ)

[書写地不明]：[大槻磐渓]，[1800年代]

1通；16.1×41.8cm

『金海奇觀』の編者で陸前国仙台藩士大槻磐渓の書簡。磐渓は、大黒屋光太夫ら日本人漂流民と交流し、その情報を『環海異聞』などにまとめた蘭学者大槻玄沢の子である。開国論者であり、ペリー来航の際は老中阿部正弘へ開国を建議している。

4. 阿部正弘書簡：伊予守宛 (アベ マサヒロ ショカン：イヨノカミ アテ)

[書写地不明]：[阿部正弘]，[1800年代]

1通；15.1×29.3cm

江戸幕府老中、阿部正弘の書簡。正弘は備後国福山藩主で、嘉永7(1854)年のペリー艦隊再来日にあたり日米和親条約を締結、200年以上にわたる鎖国を解いた。川路聖謨・筒井政憲・岩瀬忠震らを登用し、江戸に洋学所、長崎に海軍伝習所を設置するなど、西洋学術の吸収、幕政の改革に取り組んだが、安政4(1857)年、39歳で急死した。

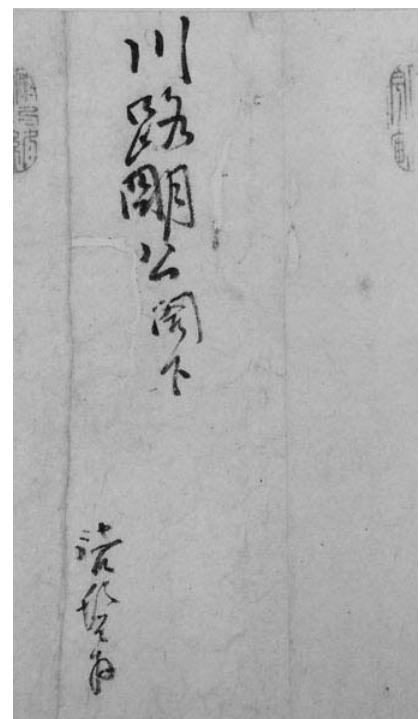
5. 佐久間象山書簡：川路聖謨宛 (サクマ ショウザン ショカン：カワジ トシアキラ アテ)

[書写地不明]：[佐久間象山]，[1800年代]

1通；17.0×70.8cm

信濃国松代藩の思想家・砲術家、佐久間象山の書簡。親交の深かった幕臣川路聖謨宛。

象山は海防掛であった藩主真田幸貫に西洋学術の研究を命じられ、またアヘン戦争に衝撃を受けて「海防八策」と呼ばれる意見書を献上。西洋式砲術を学び、江戸で塾を開いた。門弟には勝海舟・吉田松陰・橋本左内らがいる。安政元(1854)年、松陰のポーハタン号密航事件に連座して蟄居させられる。赦免後は幕府の命を受け上洛、一橋慶喜や皇族に公武合体・開国を訴えたが、元治元(1864)年、尊攘派に暗殺された。



資料5より、宛名部分

6. 西洋砲術真傳免許状 (セイヨウ ホウジュツ シンデン メンキョジョウ)

佐久間修理 [書]

[書写地不明]：佐久間修理 [自筆]，嘉永5 [1852]

1軸；18.0cm

佐久間修理は、佐久間象山の通称。象山が門弟に与えた西洋砲術の免許状。

7. 海防に関する写本綴 (カイボウ ニ カンスル シャホン ツズリ)

[書写地不明] : [書写者不明], [安政頃]

[73 丁] ; 27.0×18.9cm

佐久間修理(象山)による「天保十三年壬寅十一月上書草稿」の写本あり。蘭船の購入など海防軍備の充実を訴えたもので、「海防八策」の草稿と思われる。

8. 異国船海防関係文書 (イコクセン カイボウ カンケイ モンジョ)

[書写地不明] : [書写者不明], 嘉永 6 [1853]

15通 ; 29.8×9.0cm

ペリー及び外国艦船来航にまつわる資料。整備された台場(砲台)の見取り図や、老中阿部正弘への風刺を含む当時流行した狂歌などが収集されている。



プチャーチン来航 (1853~1854)

嘉永6（1853）年、ロシア皇帝ニコライ一世の命を受けたロシア艦隊指令長兼遣日使節エフィム・プチャーチンが長崎を訪れ、日本側に国境画定・開国通商を要請する。日本側でこれに応対したのは幕臣の筒井政憲及び川路聖謨であった。三ヶ月の交渉ののち、プチャーチンは翌年の嘉永7（1854・安政元）年、日露和親条約締結交渉のため再来日、箱館（現在の函館）・大坂を経て下田を訪れる。その際安政東海地震に遭遇し、津波によってフリゲート艦ディアナ号は大破、戸田港へ向かう途中に座礁し、翌月沈没した。

9. 川路聖謨書簡 (カワジ トシアキラ ショカン)

[書写地不明] : [川路聖謨], [1800 年代]

1通 ; 16.2×212.0cm

幕臣川路聖謨の書簡。勘定奉行及び海防掛を務めていた嘉永6（1853）年、プチャーチンの長崎来航に伴いロシア使応接掛に任せられ、翌年の安政元（1854）年にかけ、長崎及び下田においてプチャーチンと談判。日露和親条約に調印した。老中阿部正弘、堀田正睦に重用されたが、將軍繼嗣問題において一橋派とされたため、大老井伊直弼の就任に伴い左遷、後に免職・隠居の処分を受けた。慶応4（1868）年、江戸城開城の直後、ピストル自殺。

10. 筒井政憲書簡 : 西陵松庵 (ツツイ マサノリ ショカン : セイリョウ マツ アテ)

[書写地不明] : [筒井政憲], [1800 年代]

1通 ; 17.7×38.4cm

幕臣筒井政憲の書簡。西ノ丸留守居役を勤めていたが、嘉永6（1853）年のプチャーチンの来航に伴い川路聖謨と共にロシア使応接掛として長崎で交渉。また翌年下田に再来日したプチャーチンと交渉し、日露和親条約を締結、日露の国境が確定、下田・箱館・長崎の開港が決定した。

11. 遠江駿河甲斐伊豆相模武藏大地震之圖 (トオトウミ スルガ カイ イズ サガミ ムサシ オオジシン ノズ)

[出版地不明] : [出版者不明] , [嘉永 7 (1854) 頃刊]

1枚 ; 29×67.5cm

安政東海地震の被害を報じる瓦版。嘉永7(1854)年11月4日、東海沖を震源とする地震が発生、直後に安政に改元されたこともあり、安政東海地震と呼ばれる。図中にはこの地震によって下田で津波に襲われるディアナ号とみられる船と共に「ぜうせん/ほばしら/おれるかぢ/くだけるハツテイラ/のこらずりくしれず」との解説が添えられている。「ぜうせん」は蒸気船の意で、絵にも外輪と煙突が描かれているが、実際のディアナ号は帆船である。また「ハツテイラ」は小舟を表すポルトガル語が転じたもので、軍艦のボートを指す。



安政江戸地震 (1855)

安政2 (1855) 年10月2日午後10時ごろ、関東地方南部で大地震が発生。マグニチュード7程度の直下地震で、死者1万人を越えると推定されるなど、特に江戸で大きな被害があった。この地震によって、水戸藩主徳川斉昭の腹心であり『弘道館記述義』などを著して後の尊攘運動に大きな影響を与えた水戸学者藤田東湖が死亡。鯨絵と呼ばれる地震を引き起こす大鯨を題材とした錦絵が流行した。

12. 藤田東湖書簡 : 主税宛 (フジタ トウコ ショカン : シュゼイ アテ)

[書写地不明] : [藤田東湖] , [1800年代]

1通 ; 15.5×32.2cm

常陸国水戸藩の水戸学者、藤田東湖の書簡。近親者の病気の快方を報じたもの。主税のヨミは推定。

東湖は水戸学者藤田幽谷の子。文政 7(1824)年、水戸藩大津村にイギリスの捕鯨船員が上陸した事件をきっかけに水戸藩では攘夷思想が高まり、東湖もこの時船員を打ち払おうとしている。藩主徳川斉昭に重用されて藩校弘道館の設立に関わった。著書『弘道館記述義』の中で初めて「尊皇攘夷」の語を用いている。横井小楠・橋本左内・佐久間象山・西郷隆盛らと交流し、東湖の著書は尊攘派志士の間でひろく読まれた。安政江戸地震の際、江戸小石川にある水戸藩邸内の官舎で建物の下敷きになって死亡した。西郷隆盛は東湖の死を知って悲嘆にくれたと言われている。

13. 会沢正志斎書簡 : 海保左次馬宛 (アイザワ セイシサイ ショカン : カイホ サジマ アテ)

[書写地不明] : [会沢正志斎] , [1855]

1通 ; 15.9×59.8cm

常陸国水戸藩の水戸学者・儒学者、会沢正志斎の書簡。文中にある「江戸表地震之儀」は、安政江戸地震を指していると思われる。海保左次馬のヨミは推定。

正志斎は藤田幽谷に教えを受け、藩主徳川斉昭の信頼を受けて藩校弘道館の創設に尽力。大津村のイギリス船員上陸事件の際は筆談役として船員と会見、対外政策への危機感を強める。事件の翌年の文政 8(1825)年、尊皇攘夷を唱える『新論』を著し、吉田松陰らの尊皇攘夷運動に大きな影響を与えた。

資料 14 より



14. 鮫絵 (ナミエ)

[出版地不明] : [出版者不明], [安政年間]

版画 3 枚 : 木版, 多色刷 ; 36.4×36.4cm

安政江戸地震の発生直後より、無許可で大量に発行された災害瓦版。地震を引き起こすとされる大鯨が描かれていることから鯨絵と呼ばれる。常陸国鹿島神宮にある要石が大鯨を押さえているとの俗信があったため、神宮の祭神である武甕槌神(たけみかづちのかみ)が鯨を成敗している図像、逆に地震後の建設ラッシュで儲けた大工や屋根職人が鯨を押んでいる図像など、幕府が統制に乗り出すまで 200 種類にのぼる版画が発行された。製作者は不明であるが、当時高名であった絵師・戯作者の手によるものと推測される。



日米修好通商条約 (1858)

安政5 (1858) 年、日米和親条約に基づき米国総領事として下田に着任したハリスと日本側全権の下田奉行井上清直、目付岩瀬忠震が神奈川沖のポーハタン号上で調印した条約。領事裁判権や関税自主権の喪失など、日本側に不平等とされる条約であったうえ、孝明天皇の勅許を待たず調印したため、攘夷派の厳しい批判を呼んだ。同年、日本はオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの間に同様な内容の条約を次々と調印している。

15. 岩瀬忠震書簡 : 子橋宛 (イワセ タダナリ ショカン : コハシ アテ)

[書写地不明] : [岩瀬忠震], [1800 年代]

1 通 ; 15.4×82.5cm

幕臣岩瀬忠震の書簡。子橋のヨミは推定。

忠震は老中阿部正弘に抜擢され、ペリー来航以降洋学所・長崎海軍伝習所などの設立に関わる。開国論者であり、安政 5(1858) 年、アメリカ総領事タウンゼント・ハリスとの交渉のうち日米修好通商条約を締結。その後オランダをはじめとする四か国との間に次々と修好通商条約を結んだ。一橋派であり、井伊直弼の大老就任を批判したため、安政の大獄で左遷。のち罷免され、蟄居を命じられる。そのまま復帰することなく、文久元(1861) 年死去。

安政の大獄 (1858)

老中阿部正弘が安政4 (1857) 年に死去した後、幕府内の実権は老中堀田正睦及び近江国彦根藩主の井伊直弼に移った。開国政策に積極的な直弼と攘夷を唱える水戸藩主徳川斉昭・松平慶永らの間には対立が発生し、病弱であった第13代將軍徳川家定の継嗣（後継者）問題をめぐって更に激化した。直弼が紀州藩主徳川慶福を支持した（南紀派）のに対し、斉昭らは斉昭の息子一橋慶喜を支持したが（一橋派）、大老に就任した直弼は慶福（後の家茂）を後継者に決定すると共に、勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印。調印に反発した一橋派及び攘夷派の運動により、孝明天皇は幕政改革を促す勅許を水戸藩へ降下した（戊午の密勅）。これに対し、直弼は弾圧政策を開始。公卿、大名、幕臣、志士など百名以上が処罰の対象とされ、吉田松陰・頼三樹三郎・橋本左内ら八名が死刑、斉昭・慶永らが謹慎を命じられ、水戸藩家老安島帶刀は切腹。尊攘派の精神的支柱として、松陰とも交流のあった美濃の漢詩人梁川星巖はこの時期大流行をしていたコレラで急死した為、捕縛されなかった。

16. 吉田松陰書簡：高杉晋作宛 (ヨシダ ショウイン ショカン：タカスギ シンサク アテ)

[書写地不明] : [吉田松陰], [1800 年代]

1 軸 ; 23.3×31.7cm

長門国長州藩の思想家・教育者、吉田松陰が高杉晋作に宛てた書簡。

松陰は幼少の頃から英明であり、藩主毛利敬親の前で兵学を講じるほどであった。二十歳で外寇御手当御内用掛となり、海防に関わる。その後九州・江戸・東北を訪れ、会沢正志斎らと交流、佐久間象山に従学するなどして見聞を広めた。ペリー再来日に際して伊豆下田沖に停泊中のポーハタン号に密航を訴えるも拒否され、捕縛される。萩への送還後、松下村塾の主宰者として、高杉晋作・伊藤博文・桂小五郎（木戸孝允）・山県有朋など、維新の原動力となる人材を教育。日米修好通商条約に際し、幕府の専断による調印を強く批判して藩命により獄に収容され、江戸へ送られたのち、老中間部詮勝の暗殺計画などを自ら供述したため、死罪となった。

17. 頼三樹三郎書簡：草場立太郎宛 (ライ ミキサブロウ ショカン：クサバ タツタロウ アテ)

[書写地不明] : [頼三樹三郎], [1800 年代]

1 通 ; 16.3×49.7cm

儒学者である頼山陽の三男、頼三樹三郎の書簡。草場立太郎のヨミは推定。

梁川星巖らと交流し、尊皇攘夷運動に傾倒。星巖を通じて西郷隆盛とも交流をもつ。朝廷に対し幕政改革への勅許を求めて活動し、安政5(1858)年水戸藩へ勅許が降る（戊午の密勅）が、安政の大獄に際して捕らえられ、死罪となる。

18. 橋本左内書簡 (ハシモト サナイ ショカン)

[書写地不明] : [橋本左内], [1858]

1 通 ; 15.4×21.9cm

越前国福井藩士、橋本左内の書簡。医者の家系に育ち、蘭学・西洋医学を修める。藤田東湖・西郷隆盛・横井小楠と交流があり、豊富な西洋への知識を元に幕政改革を訴える。藩主松平慶永に登用され、十三代將軍徳川家定の後継として一橋慶喜擁立に奔走するが、安政の大獄で將軍継嗣問題への介入を理由として死罪となった。

19. 安島帶刀書簡：源沢甚五兵衛宛 (アジマ タテワキ ショカン：ミナサワ ジンゴベエ アテ)

[書写地不明] : [安島帶刀] , [1800 年代]

1 通 ; 15.1×77.4cm

常陸国水戸藩家老、安島帶刀の書簡。源沢甚五兵衛のヨミは推定。

藤田東湖と共に徳川斉昭を支え、水戸の両田と呼ばれた戸田忠太夫の弟にあたる。帶刀もまた斉昭を補佐し、斉昭隠居後に藩主となった徳川慶篤(徳川慶喜の兄)の代では家老となるが、安政の大獄に際し、幕府改革の密勅(戊午の密勅)を得た責任を幕府から問われ、大老井伊直弼より切腹を命じられた。

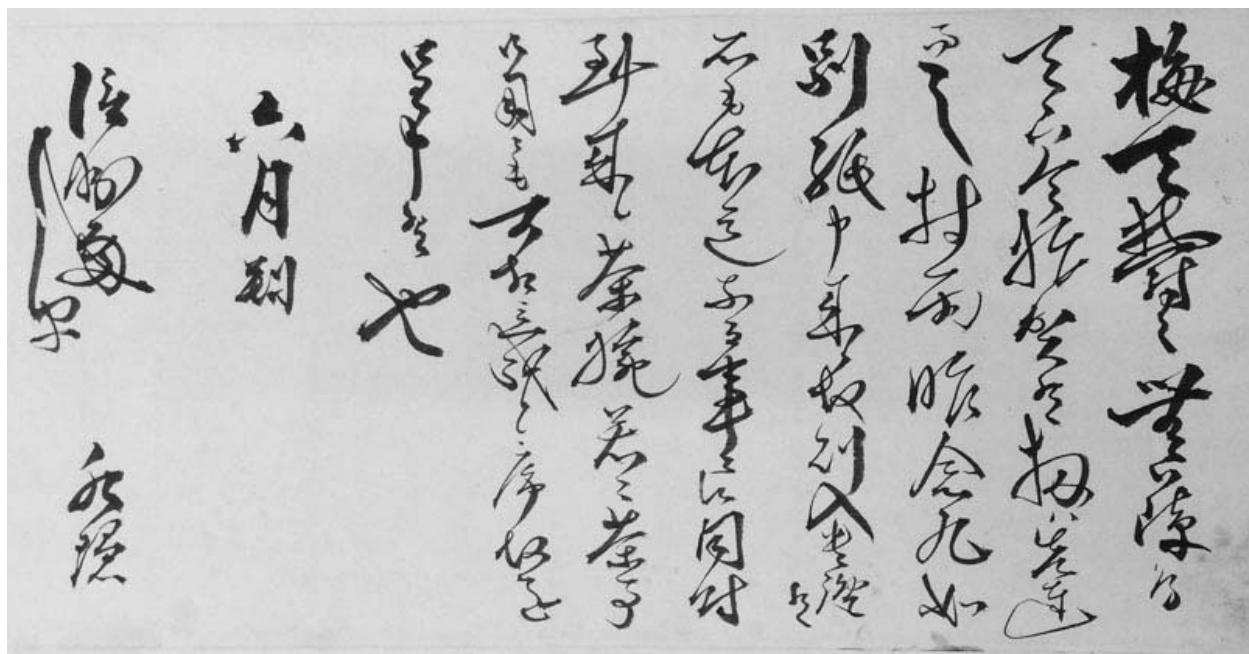
20. 徳川斉昭書簡：真田幸貫宛 (トクガワ ナリアキ ショカン：サナダ ユキツラ アテ)

[書写地不明] : [徳川斉昭] , [1850]

1 通 ; 17.3×45.0cm

常陸国水戸藩主、徳川斉昭の書簡。信濃国松代藩主真田幸貫宛。

藤田東湖や会沢正志斎の支持により、兄・徳川斉脩の嗣子として第9代水戸藩主となる。藩政改革に着手し、水戸学の観点から攘夷派として海防の強化及び開国の反対を繰り返し幕府に訴えた。ペリー来航以降は老中阿部正弘の要請により幕政に関わり、開国要求の拒絶を提案するも採り入れられなかった。日米修好通商条約に反対し、將軍繼嗣問題では自身の七男一橋慶喜を推举するが、大老井伊直弼と対立し、安政の大獄で失脚。西洋式砲術の採用、藩校弘道館の設立など、数々の改革を行い尊皇攘夷運動に大きな影響を与えたものの、藩内で生じた斉昭派と反対派の対立は幕末に至って天狗党の乱となり、この間に有能な人材を多く失った水戸藩は、明治維新に際して大きな影響力を持つことができなかった。



資料 20 より

21. 水府公獻策 (スイフ コウケンサク)

徳川斉昭著

[書写地不明] : [書写者不明], 江戸後期写 [1800 年代]

3 冊 ; 26.3×18.2cm

徳川斉昭が大塩平八郎の乱、米船モリソン号の浦賀来航をめぐる問題など、国内外の危機的状況を唱え、幕政の改革、対外関係のあり方について幕府に献策した書。

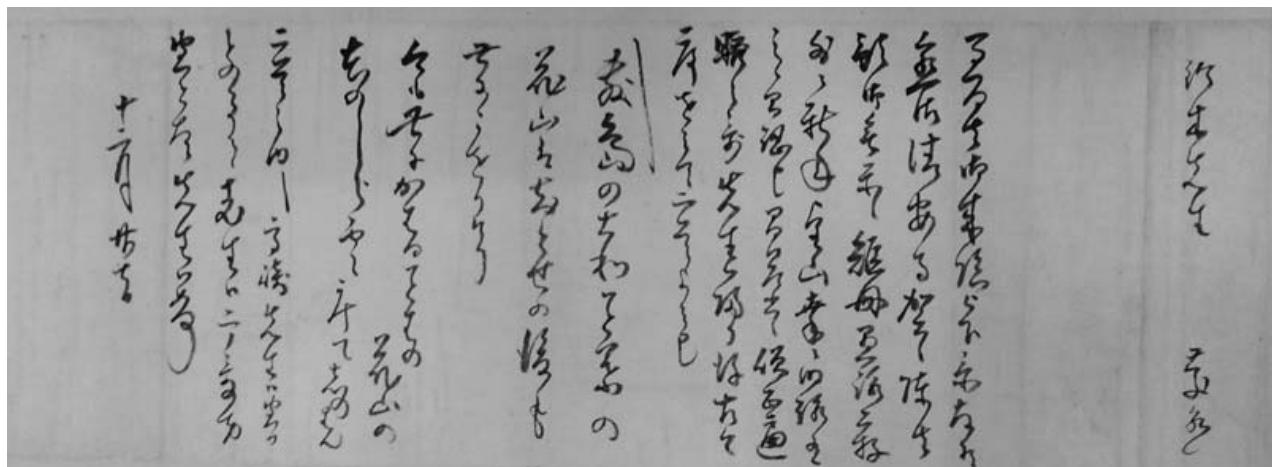
22. 松平慶永書簡 : 鈴木重嶺宛 (マツダイラ ヨシナガ ショカン : スズキ シゲネ アテ)

[書写地不明] : [松平慶永], [1800 年代]

1 通 ; 17.2×48.6cm

越前国福井藩主、松平慶永の書簡。幕臣で、明治以降は歌人として多くの著作を残した鈴木重嶺宛。

慶永は、春嶽の号が有名である。橋本左内、肥後国熊本藩の横井小楠など、多くの優秀な人材を登用し、藩政の改革に努めた。徳川斉昭と親交が深く、ペリー来航の際には攘夷論を唱えるが、のち開国論に転じる。一橋派であったため、井伊直弼の大老就任に伴い安政の大獄によって隠居謹慎の処分を受けた。桜田門外の変後に復帰。徳川慶喜を補佐し、公武合体の実現に尽力したが、戊辰戦争が始まることで断念。幕府のみならず薩摩藩、朝廷からも信頼された。



資料 22 より

23. 梁川星巖書簡 : 和泉屋源兵衛宛 (ヤナガワ セイガン ショカン : IZUMIYA GЕНBEI アテ)

[書写地不明] : [梁川星巖], [1800 年代]

1 通 ; 17.7×29.5cm

美濃国出身の漢詩人、梁川星巖の書簡。和泉屋源兵衛のヨミは推定。

星巖は郷士の家に生まれ、江戸に遊学して詩人と交友。妻紅蘭と共に諸国を周遊して試作に励み、天保 5(1834)年には江戸で玉池吟社を結成する。この頃から藤田東湖や佐久間象山との交流が始まり、時事に傾倒するようになる。やがて京都へ上り、ペリー来航の際は幕府の無策を糾弾する詩を作った。吉田松陰・橋本左内・頼三樹三郎らとも交流を持ち、尊攘派の精神的支柱となつたが、安政の大獄で幕府に捕縛される直前、当時大流行していたコレラで急死。

横浜開港 (1859)

日米修好通商条約を皮切りに次々と各国と条約を締結した幕府は、横浜・長崎・箱館・神戸・新潟の五港での自由貿易を認可した。当初は神奈川（現在の横浜市神奈川区）が開港場に定められていたが、実際に港が設けられたのは神奈川の対岸に位置する横浜（現在の横浜市中区関内）であった。幕府は、東海道の宿場があり往来の激しい神奈川に港を設ける事を避け、当時は寒村に過ぎなかった横浜を選んだのである。このため安政6（1859）年6月の開港当初は外国からの反対もあり居留地建設は進まず、翌安政7年の春以降に開発が本格化することとなった。外国人居留地は幕府が設置した運上役所（現在の横浜税関）から南側に建設され、当時の人々に「異人屋敷」と呼ばれた洋館が立ち並ぶこととなった。地番は始め国籍別に番号が付与され「アメリカ一番」「イギリス一番」となっていたが、後に統一地番が設定され、山手側にまで居留地も拡大された。

24. 御開港横濱之全圖 (ゴカイコウ ヨコハマ ノ ゼンズ)

橋本玉蘭齋 [画]

江戸：寶善堂，安政 6 [1859]

1 輋；70×191cm

橋本玉蘭齋(歌川貞秀)による横浜全景図。「御開港横浜大絵図」とも。安政 6 (1859) 年頃の横浜港を子安の方角から眺めた図。船の出入りや貨物の揚げ降ろし、居留地の土地代の徴収など港の管理を行う「御運上屋舗」を境に、北西の土地が外国人居留地となっている。

橋本玉蘭齋は江戸末期から明治初期にかけて活躍した浮世絵師で、鳥瞰の構図を得意とした。横浜に流入する異国の風物や外国人の姿を描いた横浜絵を多く残す。

25. 御開港横濱外國人住宅之圖 (ゴカイコウ ヨコハマ ガイコクジン ジュウタク ノ ズ)

[出版地不明] : [出版者不明]，[1800 年代]

1 輋；63×191cm

橋本玉蘭(歌川貞秀)による錦絵「御開港横浜大絵図二編 外国人住宅図」を模写、手彩色したものだが、元図とは誤写と思われる箇所を含め番地や人名でかなりの異同が見られる。1861 年頃の横浜を描いた元図が谷戸橋付近の住宅を「アメリカ十七番ヘーツ住館」としているのに対し、本図では「アメリカ十七番ヘポン住家」としている。後に同区画は統一地番が付与されて三十九番となり、アメリカの宣教師・医師であるヘポンが居住したが、これを踏まえて写す際に訂正したものとすると、本図の制作時期はヘポンが移住した 1862 年末以降と推定される。

26. 東海道神奈川在横濱御貿易場 (トウカイドウ カナガワ ザイ ヨコハマ オンコウエキバ)

[出版地不明] : [出版者不明]，[安政 6 (1859)]

地図 1 枚 : 木版, 多色刷；37.2×50.0cm

開港直後の横浜港の様子を伝える瓦版。外国奉行として堀織部正(利熙)の名がみえる。

27. 堀利熙書簡：山城守宛（ホリ トシヒロ ショカン：ヤマシロ ノ カミ アテ）

[書写地不明] : [堀利熙] , [1800 年代]

1 通 ; 15.6×111.2cm

幕臣堀利熙の書簡。安政 5(1858) 年、新設されたばかりの外国奉行に任じられ、翌年には神奈川奉行も兼任。各国との修好通商条約の締結、大使との交渉にあたった。万延元(1860) 年、プロイセン使節との交渉をめぐって幕府の追及を受け、同年自刃。岩瀬忠震は母方の従弟にあたる。

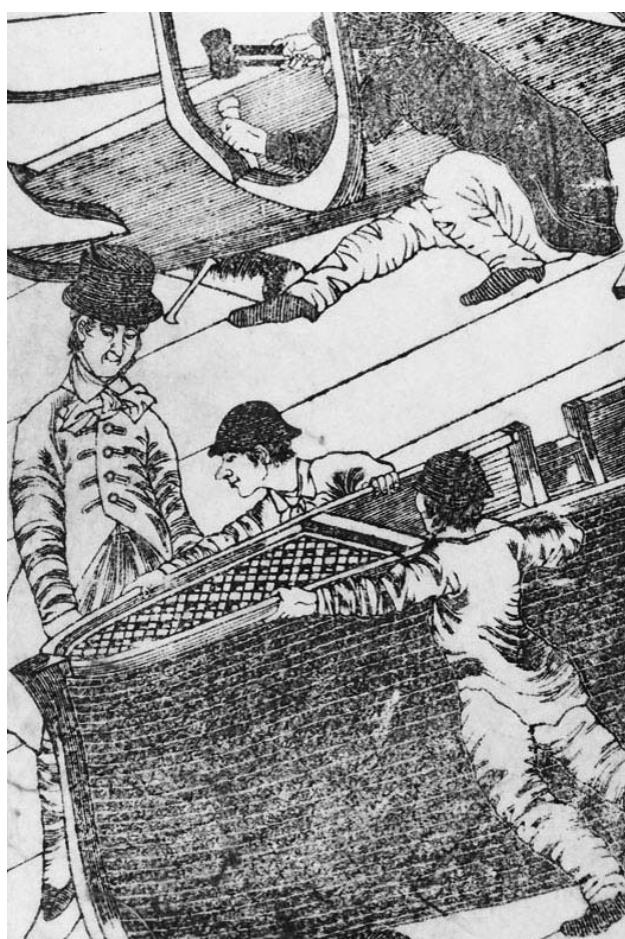
28. 横濱開港見聞誌（ヨコハマ カイコウ ケンブンシ）

玉蘭齋編集；五雲亭貞秀畫

[出版地不明] : [出版者不明] , [文久 2 (1862) - 慶応元 (1865)]

6 冊 ; 24.5×17.5cm

橋本玉蘭齋(歌川貞秀)による横浜の外国人居留地の案内書。商館や住居の内部の様子、外国の珍しい文物や風習を取材して描いている。



資料 28 より

幕末期の世相を伝える資料

29. 横井小楠書簡：弥富千左衛門宛 (ヨコイ ショウナン ショカン：ヤトミ センザエモン アテ)

[書写地不明] : [横井小楠], [1800 年代]

1通；17.1×32.4cm

肥後国熊本藩士、横井小楠の書簡。弥富千左衛門のヨミは推定。

藩校時習館の寮長を経て江戸に遊学、藤田東湖や川路聖謨と交流をもつ。肥後に帰国後は実学によって真の朱子学を修めようとする実学党の中心人物となる。天保 14(1843)年、私塾小楠堂を開く。この時の門弟第一号が徳富蘇峰・蘆花兄弟の父にあたる徳富一敬である。安政 5(1858)年、福井藩主松平慶永の招聘を受け、越前で藩政を指導、絹製品の売買など富国策で大きな利益をあげる。維新後は新政府に出仕するが、明治元(1868)年、京都で暗殺された。

30. 御問合ニ付申上覚 (オントイアワセ ニツキ モウシアゲ オボエ)

下福原村・北福原村 [熊本]: 三郎助 [ほか写], 万延元 [1860]

2 冊 ; 26.6×19.6cm

浦賀の台場を作る際の献上金「浦賀お手当金の献上」についての覚書。

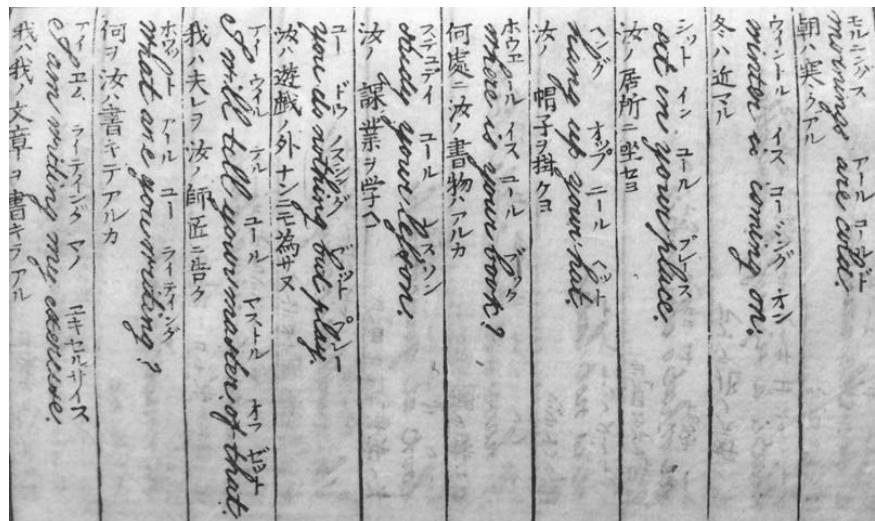
31. 英語箋 (エイゴセン)

橋政方謹識；中山武和校正

[出版地不明] : [出版者不明], 万延 2 [1861]

2 冊 ; 17.8×12.1cm

オランダ通詞石橋政方による英会話の書。通詞とは長崎でオランダ人や中国人を相手に交渉を行った翻訳官のこと。対外交渉には専らオランダ語を使用していた江戸時代にあって、最初期の英語学習書の一つである。本書には三つ葉葵にローマ字で「SADA AKIJI」の名が入った蔵書印があり、英語習得に熱心であったと伝わる伊勢国桑名藩主松平定敬、もしくは伊予松山藩主松平定昭の旧蔵と推定されるが、詳細は不明。



資料 31 より

桜田門外の変 (1860)

安政7（1860）年3月、大老井伊直弼を水戸藩浪士が襲撃、殺害した事件。安政の大獄によって斎昭と藩主慶篤が処罰された水戸藩では幕府への反発が強まっていたが、幕府が朝廷に圧力をかけ、先に水戸藩に降されていた幕政改革の勅許（戊午の密勅）を返納するための勅命を得た事で更に反幕感情が激化。会沢正志斎をはじめ返納に賛成する鎮派と、反対する高橋多一郎・金子孫二郎ら激派の対立が起こった。激派は薩摩藩士と結託して直弼襲撃を計画。3月3日朝、大部分が水戸浪士から成る十八名が江戸城桜田門外で彦根藩の行列を襲撃、直弼を殺害した。この事件により幕府の権威は失墜、安政の大獄の主導者であった直弼の死亡によって、弾圧は収束することとなる。

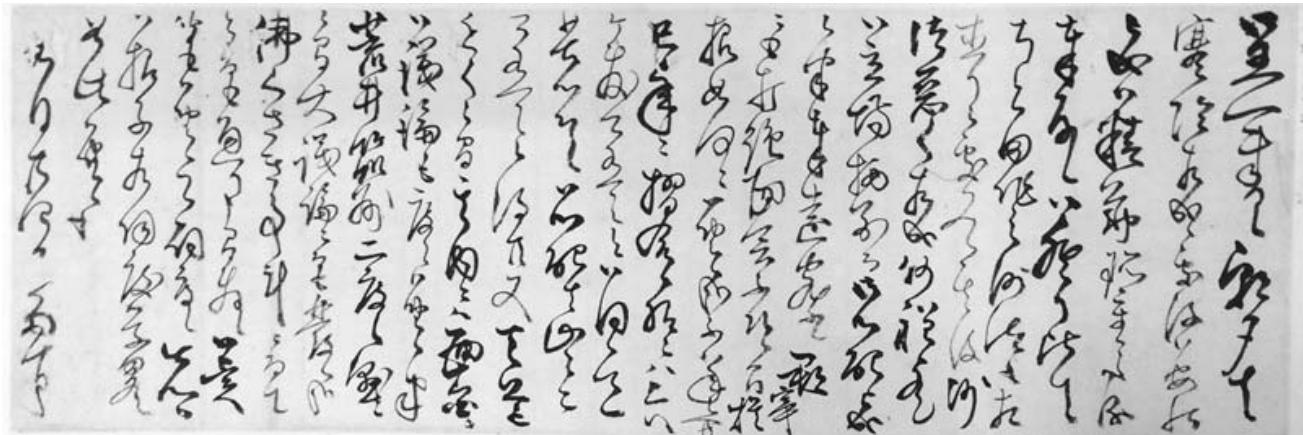
32. 高橋多一郎書簡：茂木久周宛（タカハシ タイチロウ ショカン：モギ ヒサチカ アテ）

[書写地不明] : [高橋多一郎], [1800年代]

1通 ; 15.4×45.4cm

常陸国水戸藩士、高橋多一郎の書簡。下野の儒者で足利学校代官の茂木久周宛。

水戸藩尊攘派として、西国諸藩と連携した上で幕政改革実行を画策する。戊午の密勅をめぐり、返納阻止のため水戸街道長岡宿に集結するが、幕府から解散命令が出たことで脱藩。井伊直弼襲撃計画の中心的人物となる。暗殺実行と同時に薩摩藩兵と共に上洛、朝廷を守衛する計画だったが、薩摩藩が動かなかったため京都での挙兵は頓挫。桜田門外の変以降幕府の探索が厳しくなったこともあり、襲撃から二十日後、大坂四天王寺で息子と共に自刃した。



資料 32 より

33. 金子孫二郎書簡：三木陸衛門宛（カネコ マゴジロウ ショカン：ミキ リクエモン アテ）

[書写地不明] : [金子孫二郎], [1800年代]

1通 ; 15.1×42.7cm

常陸国水戸藩士、金子孫二郎の書簡。三木陸衛門のヨミは推定。

戊午の密勅返納に反発、高橋多一郎と共に大老井伊直弼襲撃計画の中心人物となる。脱藩後、襲撃の実行者には加わらず、暗殺成功ののち薩摩藩士有村雄助と共に挙兵を計画するが、伊勢で捕縛。斬罪に処せられる。

万延元年遣米使節 (1860)

万延元（安政7、1860）年1月、日米修好通商条約批准書交換のため、幕府からアメリカへと派遣された遣外使節。正使は新見正興、副使に村垣範正、目付に小栗忠順。正月、米艦ポー・ハタン号で横浜を出帆後、ハワイを経て3月にサンフランシスコ、4月にワシントンに着き、ブキャナン大統領と会見した。この時幕府が警護の名目でサンフランシスコまで随伴させた咸臨丸に福沢諭吉が乗船しており、日本人として初めてウェブスターの英語辞書を入手している。

34. *China and Japan : being a narrative of the cruise of the U.S. steam-frigate Powhatan, in the years 1857, '58, '59, and '60*

Including an account of the Japanese embassy to the United States ... By Lieut. James D. Johnston

Philadelphia : C. Desilver / Baltimore : Cushing & Bailey, 1860

xii, [13]-448 p. : pl., 7 col. port. (incl. front.) map. ; 21 cm

ポー・ハタン号の副司令官ジョンストンによる中国・日本航海記。万延元年遣米使節として渡米した新見正興（豊前守）などの彩色肖像画が収録されている。



資料 34 より左図：新見豊前守正興、右図：小栗豊後守忠順

35. 訓蒙窮理圖解 (クンモウ キュウリ ズカイ)

福沢諭吉著

[出版地不明] : [出版者不明] , [1871] [改正再刻]

3 冊 ; 19cm

豊前国中津藩士、福沢諭吉の著書。日本で最初の科学入門書とされる。英米の書物を参考にして、空気の事、水の事、風の事など、自然現象一般を通俗的に解説したもの。

諭吉は中津藩士の家に生まれ、幼い頃に父と死別。安政元(1854)年には長崎で蘭学を学ぶ。翌年大坂の緒方洪庵の塾に入門、安政5(1858)年には藩命により江戸に蘭学塾を開く。安政6(1859)年、横浜の居留地を訪れ、オランダ語が全く通じない事に衝撃を受けて、英語習得を決意。翌万延元(1860)年、咸臨丸で渡米、文久2(1862)年には幕府による遣欧使節団の一員として渡欧している。明治元(1868・慶應4)年、蘭学塾の名を慶應義塾と改める。明治5(1872)年、『学問のすゝめ』初編が刊行され、大きな評判を呼ぶ。明治期の啓蒙思想家として数々の著作を残した。

36. Vijf jaren in Japan. (1857-1863) : Bijdragen tot de kennis van het Japansche keizerrijk en zijne bevolking

Door Jhr. J. L. C. Pompe van Meerdervoort

Leiden : Firma van den Heuvell & van Santen , 1867-68

2 v. : col. fronts., plates (partly col.) ; 25 cm

オランダ海軍軍医で、長崎海軍伝習所の教官であったポンペの著書。ポンペは幕府がオランダに発注した咸臨丸(当時はヤパン号と呼ばれていた)で安政4(1857)年長崎に来航しており、本書にもその記述がある。

翻訳書:「ポンペ日本滞在見聞記」雄松堂書店刊



ロシア軍艦対馬占拠事件 (1861)

万延2（1861）年2月、艦長ビリリヨフの率いるロシア軍艦ポサドニック号が対馬浅海（浅茅）湾に侵入、尾崎浦に停泊。艦の修理を名目に芋崎へ上陸の上、租借権を要求して近辺を占拠した。幕府は外国奉行を対馬に派遣、ロシア領事とも交渉を行ったが進展せず、船員による略奪・殺傷事件が発生。7月、幕府老中安藤信正と協議した駐日イギリス公使オールコックが自国の軍艦を派遣して圧力をかけたことなどにより、8月になってロシア軍艦は対馬から去った。

37. 文久元辛酉年魯船碇泊日記 (ブンキュウ ガン カノトトリ ノ トシ ロセン テイハク ニッキ)

満山俊蔵筆

[書写地不明] : 満山俊蔵 [自筆] , 文久 2 [1862]

1 冊 ; 21.9×13.7cm

対馬国対馬府中藩士、満山俊蔵による日記。万延2(1861)年2月3日尾崎浦に現れたロシア船が、文久元(1861)年8月15日に去り、翌年1月に事後処理が終了するまでの日誌と、事件の対応にあたった長崎奉行の岡部長常、外国奉行の小栗忠順らの書簡の写し。付録に彩色の対馬見取り図「城山天守臺ヨリ浅海浦袁景図」。

東禅寺事件 (1861)

文久元（1861）年5月28日、駐日イギリス公使オールコックの富士登山を含む東海道旅行に憤激した水戸藩の尊攘派浪士が江戸高輪の東禅寺にあったイギリス仮公使館を襲撃した事件。この事件でイギリス側に死者はなく、オールコックも無傷であったものの、書記官オリファントらが負傷した。翌年には警備兵の伊藤軍兵衛が代理公使ニールを襲撃する事件も起きている。

38. *The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan*

By Sir Rutherford Alcock ... With maps and numerous illustrations in chromolithography and on wood ..

London : Longman, Green, Longman, Roberts & Green , 1863

2 v. : col. fronts.,illus., col. plates, fold. maps. ; 22 cm

初代の駐日イギリス公使、ラザフォード・オールコックによる日本滞在記。

オールコックは、はじめ軍医であったが、アモイ駐在領事任命を皮切りに福州・上海・広東の領事を務め、1859年日本駐在総領事に任命。東禅寺事件の際は襲撃者がオールコックの部屋を突き止められなかつたため難を逃れている。ロシア軍艦対馬占拠事件、下関戦争などに関わり、文久遣欧使節を支援するなど、幕末の日本において大きな影響力を持った。本書は開国直後の外交交渉を知るうえで貴重な資料である。Tycoon（大君）とは徳川将軍のこと。

翻訳書：「大君の都」（岩波文庫） 岩波書店刊 ほか

39. *Narrative of the Earl of Elgin's mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59*

by Laurence Oliphant

Edinburgh : William Blackwood , 1859

2 v. : ill., maps ; 23 cm

イギリスの旅行家・外交官、ローレンス・オリファントの中国と日本における滞在記。

オリファントは 1857 年に特派使節エルギン伯爵ジェイムズ・ブルースの秘書として清国・日本を訪問、岩瀬忠震ら幕府の派遣した外交官と交渉し、日英和親条約を締結した。1861 年には希望して在日イギリス公使館の書記官となるが、来日直後に東禅寺事件が発生、負傷しイギリスへ帰国。本書は一度目の訪日記を含む東洋紀行を広く世に紹介した詳細な書である。日本関係は第 2 卷第 1 章から第 12 章。

翻訳書：「エルギン卿遣日使節録」 雄松堂書店刊



資料 39 より

文久遣欧使節 (1861~1863)

駐日イギリス公使オールコックらの発案により、江戸幕府が欧州に派遣した使節団。激しいインフレーション、攘夷運動の高まり、朝廷の反対などにより、米英仏蘭露との条約で約束されていた江戸・大坂の開市と、兵庫・新潟の開港が不可能となっており、その延期交渉のために結成されたものであった。文久元（1861）年12月、ジョン・ヘイ船長の率いるイギリス軍艦オーディン号で出発。ロンドン観書を皮切りに各国との間で交渉に成功し、一年の旅程を経て翌年の文久2（1863）年12月に帰国。使節団の中には福沢諭吉、寺島宗則などがあり、ロンドン万国博覧会を見物している。

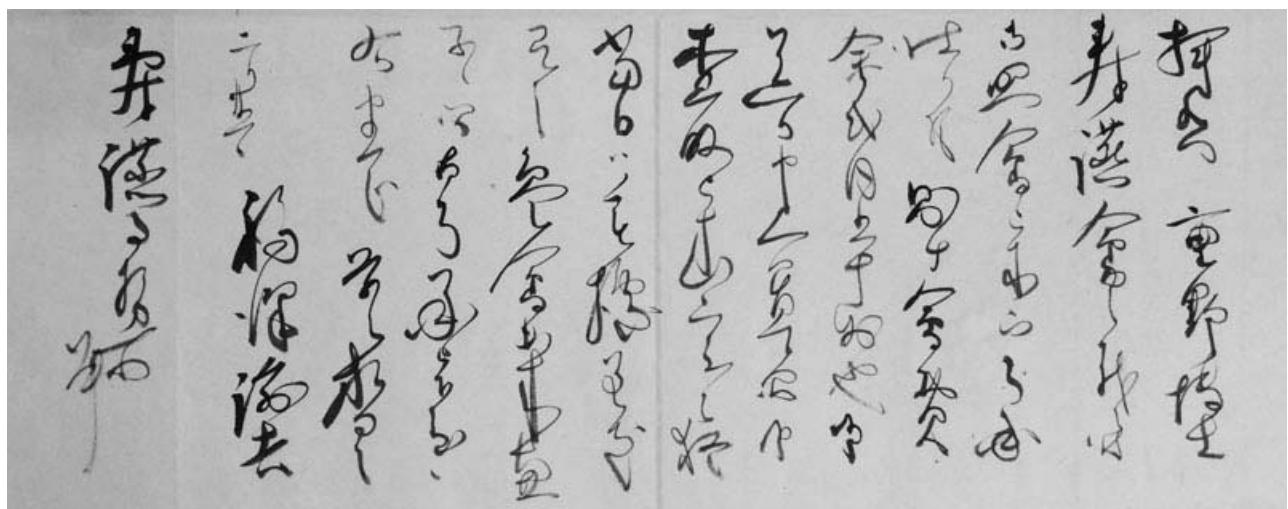
→資料50. 「貴顕手簡」内に寺島宗則からオールコックの後任であった駐日イギリス公使ハリー・パークス宛の書簡あり。

40. 福沢諭吉書簡：重野事務所宛 (フクザワ ユキチ ショカン：シゲノ ジムショ アテ)

[書写地不明] : [福沢諭吉], 1898

1通 ; 18.4×51.8cm

福沢諭吉の書簡。明治時代の歴史家である重野安繹の寿讌会（長寿の祝いの酒宴）の照会に対する返信。発給年は安繹の古希の酒宴が行われた明治31（1898）年と推定。



資料 40 より

41. Reports by the juries on the subjects in the thirty-six classes into which the exhibition was divided

London : Printed for the Society of Arts by William Clowes & Sons, 1863

1 v. (various pagings) ; 28 cm

ロンドン万国博覧会の出陳目録・解説。オールコックによる日本の工芸品の出品や、ジョン・ヘイによる日本産絹製品・産地の解説、繭の出品の紹介などがある。

イギリス公使館焼打事件（1862）

文久2（1862）年12月、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤俊輔（博文）ら長州藩の尊攘夷派志士らが、品川御殿山に建設中のイギリス公使館内に潜入、火薬に火を放って全焼させた事件。安政の大獄の弾圧以降、尊攘運動は更なる激しさを増しており、長州勢による横浜襲撃も計画されていたが、藩主毛利敬親の嗣子毛利定広（後の第14代長州藩主毛利元徳）の制止によって中止されていた。朝廷は江戸に勅使を遣わして幕府に攘夷を迫り、大老井伊直弼の暗殺以降勢力に揺らぎのあった幕府はこれを受け入れた。その一方、幕府はそれまで東禅寺など寺院に設けていた外国公使館を御殿山に建設させており、最も工事の進んでいたイギリス公使館が標的とされたのがこの事件である。

→資料50. 「貴頭手簡」内に伊藤博文の書簡あり。

42. 高杉晋作書簡（タカスギ シンサク ショカン）

[書写地不明] : [高杉晋作], [1800年代]

1軸 ; 15.2×205.8cm

長門国長州藩士、高杉晋作の書簡。長州藩の大組士高杉小忠太の嫡子として生まれ、藩校明倫館に入校。安政4（1857）年松下村塾に入門し、吉田松陰の教えの下で頭角を現す。文久2（1862）年の5月から7月の間、藩主の許可を得て上海に滞在、半殖民地化する清国の現状を視察し強い衝撃を受ける。この年の12月にイギリス公使館を焼き打ち。翌年の文久3（1863）年5月、下関事件が発生。下関防衛を任せられた晋作は身分によらず志願兵で構成された奇兵隊を創設。8月には英仏米蘭の4カ国連合艦隊による下関砲撃事件が起り、この時の講和使節に選ばれている。藩内での派閥争いによる脱走後、伊藤博文らと挙兵。藩政において討幕派に主導権を握らせる。薩長同盟、第二次長州征伐に関わるが、肺結核のため慶応3（1867）年、27歳で死去した。



寺田屋事件（1862）

文久2（1862）年4月、公武合体の実現のために上京した薩摩藩主島津茂久の父・久光の動きに乘じ、薩摩藩内の尊攘派が攘夷決行・反幕闘争を計画した。久光自身はこれを暴挙として自重するよう求めたが、有馬新七をはじめとする尊攘激派は命に従わず、久留米藩の真木和泉ら藩外の攘夷派をも一団に加え、強風の夜に京市街へ放火、騒ぎの中で閑白九条尚忠・所司代酒井忠義を襲撃、京における実権を支配し、幕府と開戦する計画をたてた。再三の鎮静の命を無視する有馬らに久光は鎮圧を決意、伏見の船宿寺田屋へと奈良原繁ら八名の藩士を遣わせた。寺田屋では争議が決裂、斬り合いが発生し、尊攘派は六名が死亡、二名が翌日自刃した。残党の西郷従道、大山巖らは鹿児島へ護送、謹慎処分となった。この事件をきっかけに薩摩藩内の尊攘派は勢力を失った。

→資料50. 「貴頭手簡」内に大山巖の書簡あり。

下関戦争 (1863～1864)

攘夷決行の日とされていた文久3（1863）年5月10日より、下関海峡を通行するアメリカ商船ペムプロウク号、フランス軍艦キンシャン号、オランダ軍艦メデューサ号が、長州藩の武装船に次々と砲撃を受けた。このうちオランダはメデューサ号がその場で応戦、アメリカは横浜から軍艦が下関へ赴き長州側と交戦、フランスは旗艦セミラミスを率いる極東艦隊指令艦長ジョーレスが自ら遠征し長州に上陸、交戦。翌元治元（1864）年、帰任したばかりのイギリス公使オールコックは攘夷運動の急先鋒である長州への遠征を計画した。8月、イギリス・アメリカ・フランス・オランダの四か国から成る連合艦隊が下関海峡に進入し長州への攻撃を開始。急遽イギリス留学より帰国していた伊藤俊輔（博文）らが戦闘回避を画策し、藩と交渉に臨んだが果たせなかった。戦闘は三日間に渡って行われ、長州側は砲台、弾薬庫、屯所を破壊されて敗退。禁門の変に破れ弱体化を余儀なくされていたこともあり休戦を申し入れた。宍戸刑馬を名乗る高杉晋作を使節の使者とし、巨額の賠償金など連合国側からの5条件を長州が受け入れ、講和が成立。この時奇兵隊として後の内閣総理大臣山縣有朋が参加しており、負傷している。

43. De Medusa in de wateren van Japan, in 1863 en 1864

door F. de Casembroot

's-Gravenhage : Gebroeders van Cleef, 1865

xi, 150 p., [5] folded leaves of plates : col. maps ; 23 cm

下関戦争に参加したオランダ艦メデューサ号の艦長カセムプロートによる手記。メデューサ号は、長崎から横浜への航路の途中、先に下関海峡で砲撃を受けたキンシャン号から警告されたが、長州藩主毛利敬親とオランダ海軍との間に交流があり、また日蘭関係を信用していたため予定通り海峡を航行して砲撃され、水兵に死傷者を出した。翌年の四か国艦隊による下関砲撃にもオランダ艦隊として参加している。

44. 山縣有朋書簡：川村景明宛（ヤマガタ アリトモ ショカン：カワムラ カグアキ アテ）

[東京]：山縣有朋 [自筆]，[1800年代]

1軸；17.7cm

長門国長州藩士、山縣（山縣とも）有朋の書簡。大日本帝国陸軍元帥、川村景明宛。

長州藩の下級武士の家に生まれ、安政5（1858）年派遣された京都で尊攘派志士と接触。後に長州で松下村塾に入門した。文久2（1862）年、藩による外国軍艦への砲撃に参加。高杉晋作の結成した奇兵隊の一員としてその後の四か国艦隊による下関攻撃（下関戦争）にも参加している。討幕派として藩論を統一させ、戊辰戦争では北陸・会津征伐総督の参謀に任じられる。明治に入ってからはヨーロッパ及びアメリカを視察、帰国後は軍政の改革にあたり、徴兵制を取り入れた。

第3代・第9代内閣総理大臣など、新政府の要職を歴任。政界・軍部共に強い影響力を保ち続けた。

八月十八日の政変 (1863)

文久3(1863)年8月18日、会津・薩摩藩を中心とした公武合体派が、それまで朝廷内で勢力を奮っていた尊皇攘夷派を京都から一挙に追放したクーデター事件。これにより尊攘運動の中心であった長州藩の勢力と、攘夷派に同調する三条実美をはじめとする公家七卿が追放された。

→資料50.「貴顕手簡」内に三条実美の書簡あり。



天狗党の乱 (1864)

水戸藩では、第9代藩主に徳川斉昭を擁立し斉昭の藩政改革に賛成した改革派勢力が、反対する門閥派から「天狗党」と呼ばれ、両者は対立していた。安政5(1858)年、水戸藩に降下された幕政改革への勅命(戊午の密勅)の返納をめぐり、改革派は密勅の返納に賛成する鎮派と、反対する激派に分裂。激派は桜田門外の変を引き起こし、東禅寺事件などにも関わった。元治元(1864)年3月、水戸藩の尊攘激派で藤田東湖の四男、藤田小四郎が筑波山にて挙兵。横浜鎖港、攘夷の決行を訴えた。小四郎の挙兵によって尊攘激派が集結、これに常陸・下野・下総の農民らが加わった。門閥派である水戸藩執政市川三左衛門は藩内の実権を握り鎮派と結託、諸生党と称し、天狗党と交戦する。党内の一部勢力が宿場町で暴虐を働いたこともあり、幕府は天狗党を暴徒と見なし、討伐を決定。諸藩にも出兵を命じた。水戸藩尊攘派の重鎮武田耕雲斎は、当初領内の騒乱を鎮めるため水戸入城を試みたが果たせず、天狗党に合流。党の首領となる。那珂湊における幕府軍及び諸生党との戦いに敗れた後、天狗党は徳川慶喜を通じて尊皇攘夷を朝廷に訴えるため京都を目指すが、越前に至って慶喜の率いる幕府軍が党への総攻撃を計画している事を知り、加賀藩に降伏。小四郎、耕雲斎をはじめ350人が斬罪となった。

45. 徳川慶喜書簡：武田耕雲斎宛 (トクガワ ヨシノブ ショカン：タケダ コウウンサイ アテ)

[書写地不明] : [徳川慶喜], [1800年代]

1通 ; 17.2×30.2cm

江戸幕府第15代將軍、徳川慶喜の書簡。天狗党の首領で、水戸藩の元執政でもあった武田耕雲斎宛。

慶喜は徳川斉昭の七男として生まれ、弘化4(1847)年には御三卿の一橋家を相続。安政2(1855)年、病弱であり嫡子のない第13代將軍徳川家定の後継者候補として名前が挙がるもの、紀州藩主徳川斉順の次男慶福(後の家茂)を支持する南紀派との争いに敗れ、また日米修好通商条約への調印に抗議した折に不時登城した責を問われて、安政の大獄で隠居を命じられる。文久3(1861)年、將軍後見職として復帰。慶応2(1866)年には家茂の死去に伴い征夷大將軍となる。軍備の充実をはかり、幕府の建て直しに努めるが、倒幕派に抗えず慶応3(1867)年に大政奉還。翌年鳥羽・伏見の戦いを皮切りとして戊辰戦争が勃発。鳥羽・伏見の戦いに敗れた慶喜は新政府軍に恭順し、江戸城を明け渡して謹慎。そのまま明治を迎えた。謹慎が解かれてからも政界と交わることはなく、写真・狩猟などの趣味に生きた。



資料 45 より



禁門の変・第一次長州征伐 (1864)

元治元（1864）年7月、八月十八日の政変によって失った京都での勢力挽回を画策する長州軍が、会津・薩摩を中心とする公武合体派軍と衝突した事件。蛤御門の変とも言う。長州軍は一時京都御所内にまで迫るもの、薩摩藩が救援に駆けつけたため形勢は逆転、首謀者のほとんどは自害・戦死した。長州藩の責任を問う朝廷は幕府へ長州征伐の勅命を発し、幕府は諸藩による軍を編成して長州へ遠征。第一次長州征伐が起こる。長州側と遠征軍側の交渉の末、藩主毛利敬親父子が謝罪文書を提出した事などにより、征長軍は引き上げた。

→資料8. 「異国船海防関係文書」内に「長州征討大名配置の写」等あり。

薩長同盟 (1866)

長州征伐後、藩主毛利敬親父子らの江戸召致の命に長州藩が従わなかつたため、幕府は再度の征伐を公表した。幕府が独裁的権力を強めることを危惧した薩摩藩は、高杉晋作率いる尊攘派が主導権を得た長州と接近。八月十八日の政変以来反目していた両藩だが、長州は軍備力の増強と倒幕運動への助力を望んでおり、双方の思惑が一致する。慶応元（1865）年、薩摩藩及び龜山社中（後の海援隊）の助力により長州藩は武器購入に成功。翌慶応2（1866）年、土佐藩・坂本龍馬の立会いにより、薩摩藩の小松帶刀及び西郷隆盛と、長州藩の木戸孝允との間で同盟が成立。これ以後、幕府側であった薩摩藩が、長州藩と共に倒幕運動の中心となつて行つた。

46. 西郷隆盛書簡：橋口彦次宛（サイゴウ タカモリ ショカン：ハシグチ ヒコジ アテ）

[書写地不明] : [西郷隆盛], [1800年代]

1通 ; 17.5×36.4cm

薩摩国薩摩藩士、西郷隆盛の書簡。

下級武士の家に生まれ、藩主島津斉彬に従つて江戸へ赴いた事をきっかけに藤田東湖・橋本左内らと交流をもつ。將軍繼嗣問題では斉彬と共に一橋慶喜を支持し、江戸・京都で活動するが、安政の大獄が始まると薩摩に帰還。入水をはかるが生還し、大島に身を潜めた。三年に及ぶ潜伏生活のち、斉彬の弟で第29代藩主島津忠義の父でもある島津久光に登用されて藩政に復帰。その後、流罪となるが、元治元（1864）年には再び召還され、禁門の変では薩摩軍として長州を鎮圧する。長州征伐以降、討幕派寄りとなり、慶応2（1866）、薩長同盟を結ぶ。戊辰戦争では勝海舟との会談の後、江戸城を無血開城。明治以降は薩摩藩の改革や、新政府の軍政に携わるが、徐々に明治政府に不満を持つ士族と関わりを持つようになる。いわゆる征韓論争に敗れて下野し、明治10（1877）年、西郷に教えを受けた私学校の生徒が鹿児島（薩摩）にある陸軍省の火薬庫を襲撃したことをきっかけに挙兵。西南戦争が勃発する。士族を中心とする軍を率いて熊本・宮崎を転戦するが政府軍に追い込まれ、同年9月24日鹿児島県城山で自刃。満49歳没。

47. 木戸孝允書簡：高杉小忠太宛（キド タカヨシ ショカン：タカスギ コチュウタ アテ）

[書写地不明] : [木戸孝允], [1871-1873]

1軸 ; 17.0×271.3cm

長門国長州藩士、木戸孝允（桂小五郎）の書簡。高杉晋作の父・高杉小忠太に宛てた書簡 2通を軸装したもの。発給年は明治以降と推定される。

長州の藩医和田家に生まれ、7歳で桂家の養子となる。嘉永2（1849）年、吉田松陰の門弟となり、これ以降松陰と密接な関係を結ぶ。江戸遊学を経て長州のみならず薩摩・水戸藩などの尊攘派志士と交流を持ち、長州藩における尊攘夷派の指導者の存在となる。禁門の変で長州藩が敗れてからは藩政改革に尽力し、薩長同盟を締結。第二次長州征伐の折には藩主毛利敬親より木戸姓を賜るなど信頼された。幕府崩壊後は明治政府の官僚として五箇条の誓文の起草に関わり、版籍奉還・廢藩置県などを実施。征韓論では西郷隆盛と対立、これに敗れた西郷は下野することとなった。明治維新の立役者として日本の近代化に大きく貢献するが、その過程で生じた政争や不平士族の反乱への対応に追われ、病に倒れる。西南戦争の最中の明治10（1877）年、京都で死去した。

大政奉還 (1867)

慶応3（1867）年10月14日、第15代將軍徳川慶喜が政権を朝廷に奉還、朝廷は翌15日に勅許した。江戸時代を通じて日本の実質的最高権力者であった幕府だが、建前上は朝廷より行政を委任されており、慶応年間に入って激しさを増す倒幕運動への対策として、幕府が大政を朝廷に奉還、独裁政治体制を改革すると言う意志表示を行うものであった。これは公武合体が失敗に終わり方向転換を余儀なくされた土佐藩が、元藩士である坂本龍馬の新国家構想「船中八策」に基づき、後藤象二郎の献策によって藩主山内豊信（容堂）の名で提出した「大政奉還建白書」を受けたものであった。同15日、薩長の討幕派は朝廷より討幕の密勅を受けており、大政奉還はこの名目を失わせた形となった。

48. 坂本龍馬書簡：後藤象二郎宛 (サカモト リョウマ ショカン：ゴトウ ショウジロウ アテ)

[書写地不明] : [書写者不明], [1800年代]

1軸 ; 16.5cm

土佐國土佐藩士である坂本龍馬の書簡。同じく土佐藩士の後藤象二郎宛。

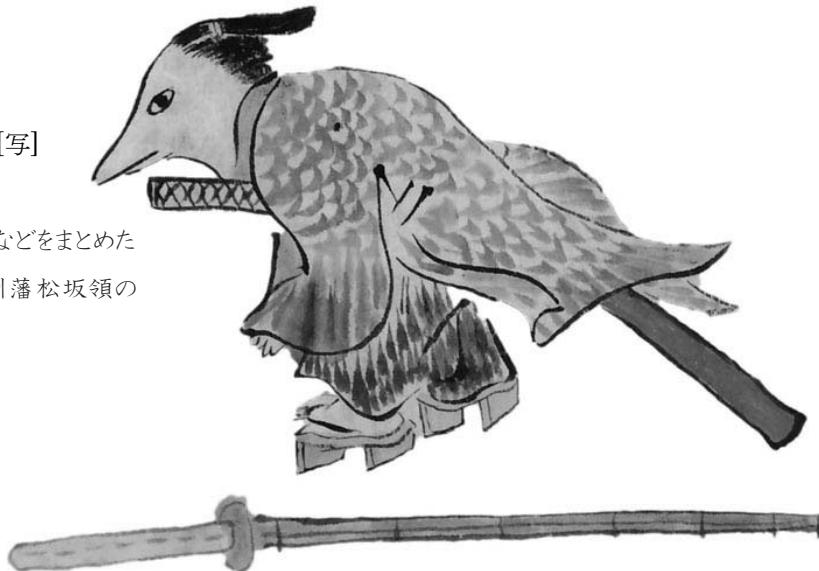
坂本龍馬は土佐藩の下級武士である郷士の家に生まれ、嘉永6(1853)年、江戸へと剣術修行に赴き、北辰一刀流を学ぶ。文久元(1861)年に結成された土佐勤王党に加わり、久坂玄瑞など他藩の尊攘志士とも交流を持つ。文久2(1862)年に脱藩、江戸で幕臣勝海舟の門弟となる。神戸海軍操練所の設立に奔走し、塾頭となるが、勝の失脚により操練所は解散。薩摩藩預かりとなった龍馬は長崎龜山に商社(龜山社中)を設け、薩摩藩の名義で長州藩の武器を購入するなど薩長の接近に協力し、慶応2(1866)年、薩長同盟を成立させる。慶応3(1867)年には藩命を受けた後藤象二郎と会談、脱藩の罪を許され、海援隊長となる。同年6月、京都へ向う船中でまとめた大政奉還、公儀政治などの新国家構想「船中八策」は後藤を通じて藩論を動かし、10月に藩主山内豊信が幕府へ大政奉還を建白、將軍徳川慶喜はこれを受け入れ大政奉還が実現した。なおも新政治体制確立のため奔走していた11月15日、京都近江屋で京都見廻組に襲撃され、暗殺された。

49. 風聞集 (フウブンシュウ)

[書写地不明], 嘉永6 [1853]-明治元 [1868] [写]

5冊 ; 27cm

ペリー来航から戊辰戦争に至る書簡・風聞・狂歌などをまとめた資料集。製作者は不明だが、収録資料から、紀州藩松坂領の人物であると推定される。



資料49より

王政復古の大号令 (1867)

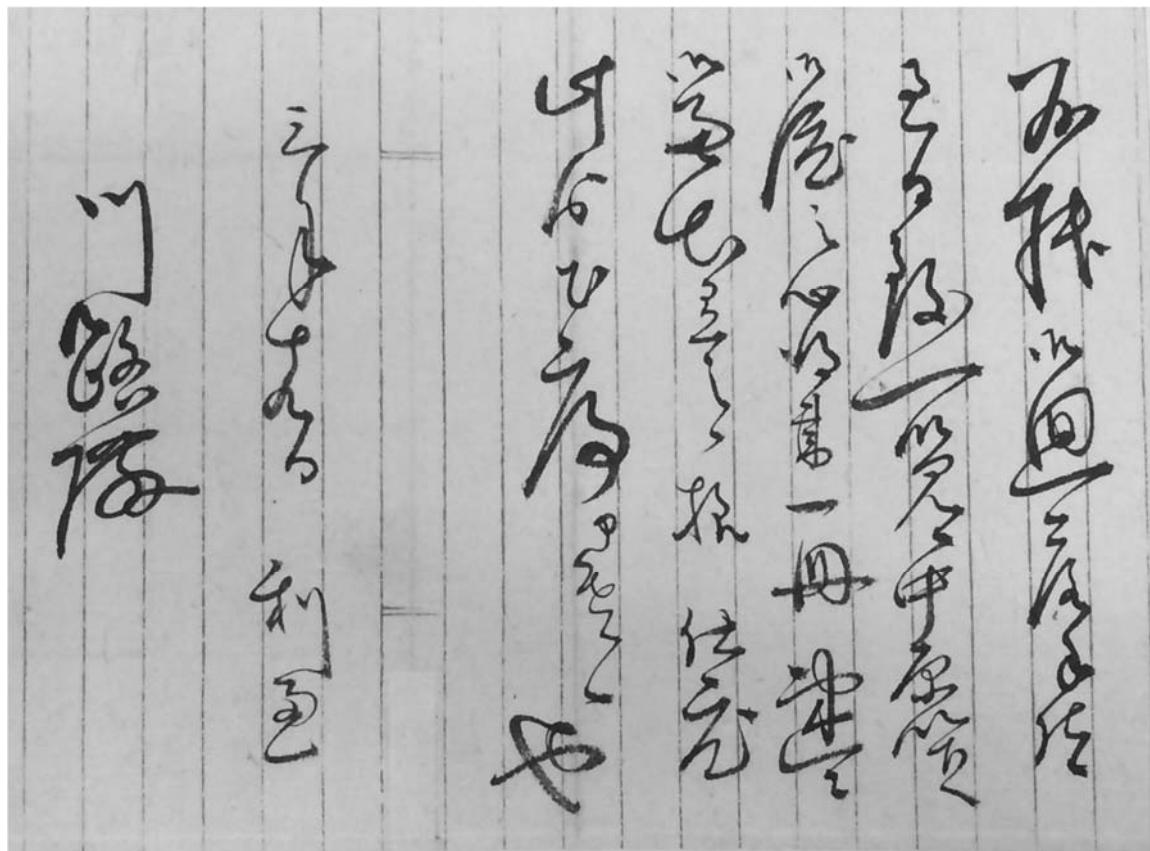
大政奉還により一旦討幕の名目を失った薩摩藩の大久保利通・西郷隆盛らと連携した公卿岩倉具視が幕府勢力を排除した新体制の樹立を画策し、慶応3(1867)年12月9日、王政復古の大号令を奏上した。これは、慶喜を始めとして幕府を支えてきた一会桑体制を瓦解させて政権を朝廷に戻し、薩摩・土佐・安芸・尾張・越前に長州を加えた六藩での新政府体制の発足を宣言するものであった。幕府側はこれに反発する形で京都に軍勢を集結、鳥羽・伏見の戦いが起こったことにより、戊辰戦争が勃発した。

50. 貴顕手簡 (キケン シュカン)

[書写地不明] : [三条実美ほか], [1800年代] - [1900年代]

1軸

三条実美 (サンジョウ サネトミ)、岩倉具視 (イワクラ トモミ)、西郷隆盛 (サイゴウ タカモリ)、大久保利通 (オオクボ トシミチ)、木戸孝允 (キド タカヨシ)、伊藤博文 (伊トウ ヒロブミ)、大山巖 (オオヤマ イワオ)、寺島宗則 (テラシマ ムネノリ) など 29 通の書簡を軸装したもの。



資料 50 より、大久保利通書簡

戊辰戦争 (1868)

慶応4 (1868) 年戊辰の年1月から翌年5月にかけて、新政府軍と旧幕府派との間で行われた内戦。鳥羽・伏見の戦い、上野の彰義隊の戦い、会津戦争、箱館戦争などの総称。慶応4 (1868) 年1月3日に勃発した鳥羽・伏見の戦いにおいて、幕府軍は数で勝っていたが、新式の銃火器を備えた新政府軍によって翌日には退却を余儀なくされた。将軍徳川慶喜は大坂を脱出して海路江戸へ向い、7日には朝廷より慶喜討伐の勅命が降下され、有栖川宮熾仁親王を大総督とする東征軍が進軍を開始した。勝海舟の支持を得た幕臣山岡鉄舟は駿府に赴き、東征軍参謀の西郷隆盛と会見して慶喜の恭順の意を伝え、勝と西郷の会談により江戸城は無血で開城された。東征軍は北上し、奥羽越の列藩同盟をはじめとする東北諸藩と交戦。9月、最後まで抗戦を続けていた会津藩が降伏し、続いて庄内藩が降伏。幕府軍残党はなおも北海道の箱館に渡り抗戦したものの、明治2 (1869) 年5月に降伏し、戊辰戦争は終結した。

51. 竹烟 (爐) 湯沸火初紅 (チクロ ニ ユワキテ ヒハジメテ クレナイ ナリ)

山岡鉄舟 [書]

[書写地不明] : [山岡鉄舟], [1800年代]

1軸 ; 129.0cm

幕臣山岡鉄舟の書。「竹爐湯沸火初紅」は、南宋の詩人、杜耒(とらい)の詩「寒夜」の一節。竹の爐に湯が沸き、炭火もようやく紅くなってきたという意味。

鉄舟は旗本の子として生まれ、幼時から槍術や剣術を修めた。安政3(1856)年には幕府による武術練習所である講武所の剣術世話役に、文久2(1862)年には新設された浪士隊の取締役となる。慶応4(1868)年3月、戊辰戦争の最中、大坂から江戸へと脱出して来た徳川慶喜の恭順の意を伝えるため、勝海舟の使者となって駿府の西郷隆盛と会見。江戸城無血開城への道筋をつける。維新後は新政府に出仕、明治天皇の侍従などを歴任した。能書家としても知られ、多くの書が残されている。

52. 林影溪光静自如 (リンエイ ケイコウ シズカニシテ ジジョ タリ)

山岡鉄舟 [書]

[書写地不明] : [山岡鉄舟], [1800年代]

1軸 ; 129.0cm

山岡鉄舟の書。「林影溪光静自如」は、南宋の詩人、張栻(ちょうしょく)の詩「跋王介甫遊鐘山図」の一節。林の影に谷川の光、静かで平静である、という意味。

明治時代の文学

明治時代初期は、江戸時代より続く曲亭馬琴、十返舎一九らによる戯作の流れを汲んだ戯作文学、西洋文学を日本に紹介する翻訳文学がおこったが、明治中期に至ると、資本主義の発展や西洋文化の流入に伴い、自我や個性といった新しい価値観に基づく文学作品が次々と発表された。キリスト教者である徳富蘆花の『不如帰』、新たに誕生した知識階級の葛藤をえがく夏目漱石の一連の作品など、多彩な小説、また詩歌、俳句、演劇が広く民衆に受け入れられた。

53. 徳富蘆花書幅 (トクトミ ロカ ショフク)

徳富健次郎 [筆]

[書写地不明]：徳富健次郎 [写]，大正 7 [1918]

1 軸；129.3cm

明治・大正期の小説家徳富(徳富)蘆花の書幅。本名、徳富健次郎。明治元(1868)年、肥後国水俣の惣庄屋で、思想家横井小楠に教えを受けた父・一敬の次男として生まれる。兄の蘇峰(猪一郎)と共に京都の同志社に学び、キリスト教に入信。大山巖の長女をモデルとして悲恋をえがいた小説『不如帰(ほどとぎす)』は当時のベストセラーとなった。本資料は、旧約聖書イザヤ書 11 章第 3 節-9 節を出典とした書を軸装したもの。

54. 夏目漱石書簡：菅虎雄宛 (ナツメ ソウセキ ショカン：スガ トラオ アテ)

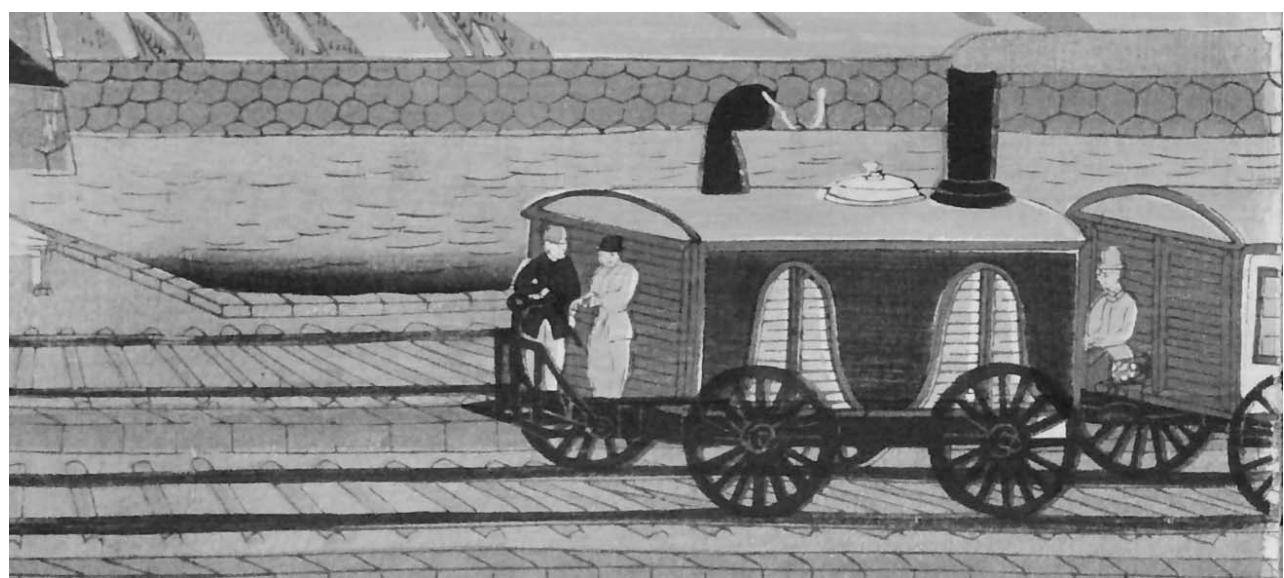
[東京]：[夏目漱石]，1903

1 通；17.9×89.0cm

明治・大正期の小説家、夏目漱石の書簡。明治 36 (1903) 年 3 月 9 日、東京市本郷区より、小石川区在住菅虎雄宛の自筆書簡。

漱石は本名を金之助といい、幼少期は養子として他家で育てられた。漢学・英語を学び、東京帝国大学(現在の東京大学)では英文科に入学。卒業後は高等師範学校、熊本の第五高等学校(現在の熊本大学)の英語教師となる。明治 33(1900) 年、イギリスに留学。帰国後は帝国大学で英文学を教える。明治 38(1905) 年、『吾輩は猫である』で文壇に登場。以後、近代文明における知識人の自我、及びその葛藤をえがいた小説を多く著した。代表作に『坊っちゃん』『三四郎』『こころ』『明暗』など。

菅虎雄は帝国大学の独逸文学科を卒業したドイツ語学者で、漱石の二年先輩にあたる。第五高等学校に漱石の就職を斡旋するなど、終生親しく付き合い続けた。



明治の交通

日本において、鉄道機関が初めて披露されたのは、ロシア艦隊司令官のプチャーチンが、艦上で鉄道模型を走らせた嘉永6（1853）年のことであった。その二年後の安政2（1855）年には、プチャーチンの模型を見学していた佐賀藩が蒸気機関車の模型を製作している。明治2（1869）年、大隈重信と伊藤博文の後押しにより、明治政府が鉄道建設を決定。翌年には新橋一横浜間が着工、明治5（1875）年5月にイギリスから輸入された車両を使用して品川一横浜間が仮開業し、10月14日、新橋一横浜間で正式開業した。明治15（1882）年には、レール上に乗り合い馬車を走らせる馬車鉄道が新橋一日本橋間に開業し、この路線は後に路面電車へと移行されている。

55. 東京高輪海岸蒸氣車鐵道走行之全圖

（トウキョウ タカナワ カイガン ジョウキシャ テツドウ ソウコウ ノ ゼンズ）

一猛斎芳虎画

両國廣小路南側 [東京]：加賀屋吉兵衛，[1800年代]

版画3枚：木版，カラー

一猛斎（歌川）芳虎により、明治初期、鉄道開業の頃に描かれた錦絵。車体は想像によるものと思われ、実際に導入されたものとは大きく異なっている。蒸気車が走っているのは八つ山（日本初の陸橋）、御殿山や高輪界隈など現在の品川駅近辺である。着工当時、高輪近辺の土地の所有者であった薩摩藩の反対により海岸沿いにレールを敷くことができず、御殿山を切り崩した土で海を埋め立て、その上に蒸気車を走らせた。

芳虎は歌川国芳の門人だったが、後に破門となり、一猛斎はそれ以降の号である。武者絵や開化絵を多く手がけた。

56. 東京名所鉄道馬車往復上野公園山下之図

（トウキョウ メイショ テツドウ バシャ オウフク ウエノ コウエン ヤマシタ ノ ズ）

広重画

東京：榎本藤兵衛，[明治初期（1800年代）]

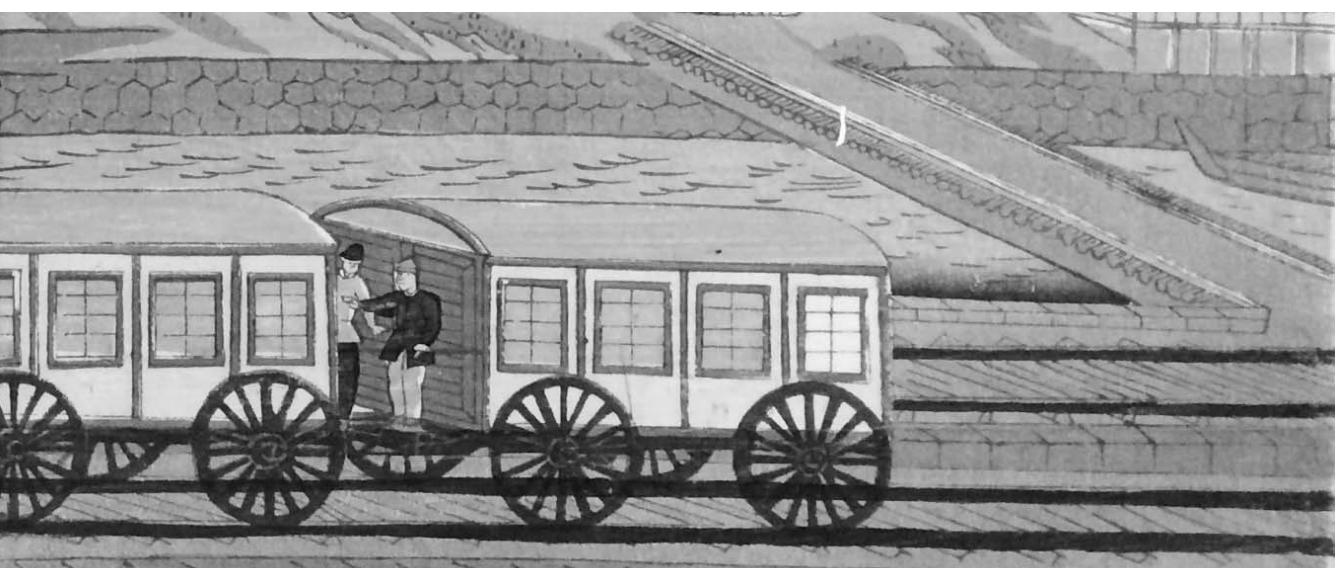
3枚；36×24cm

三代広重による3枚続きの錦絵。上野の山下周辺を往来する鉄道馬車を描いたもの。鉄道馬車は、馬車鉄道ともい、軌道（レール）上を走る馬車の輸送機関である。

三代広重は、初代広重の門人で、二代広重が師家を離縁になった後に婿に入り、自身二代広重を称した（実は三代）。

本姓は後藤、後に安藤。画姓は歌川。横浜絵、東京名勝絵、開化絵を多く描いた。

資料 55 より



参考文献

- ✧ 『福沢諭吉の「科學のススメ」』 桜井邦朋著 祥伝社 2005.3
- ✧ 『万延元年遣米使節航米記』 木村鉄太著；高野和人編訳 2005.4
- ✧ デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ✧ 国史大辞典, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ✧ 日本大百科全書, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ✧ 日本国語大辞典, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ✧ 日本人名大辞典, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ✧ 日本歴史地名大系, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)

幕末・明治を生きた人々
～書簡とその周辺資料～

2015年5月25日 発行

著 者—東海大学付属図書館
印 刷—事務部 業務管理課（印刷担当）
発行者—東海大学付属図書館
<http://www.time.u-tokai.ac.jp/>
〒259-1292 平塚市北金目四丁目1番1号
電話 0463-58-1211 (代)
